

観世流仕舞 隅田川 巻絹
 塩谷 恵
 赤井きよ子
 地謡 立花香寿子
 前田和子
 前田飛南子
 宮下昌子
 西野翠舟

観世流能 賀茂
 前シテ 里女 山中 雅志
 後シテ 別雷神
 前ツレ 里女 上野 雄介
 後ツレ 天女 山下 あさの
 ワキ 室明神/神職 廣谷 和夫
 ワキツレ 従者 喜多 雅人
 ワキツレ 従者 中村 宜成
 アイ 末社ノ神 小西 玲央
 笛 野口 亮
 小鼓 成田 奏
 大鼓 辻 雅之
 太鼓 中田 弘美
 後見 赤松 禎友
 大槻 裕一
 地謡 生一 知哉
 大西 礼久
 梅若 堯之
 長山 耕三
 上野 朝彦
 山本 麗晃
 金子 昭
 田中 誠士

金流仕舞 八島
 中嶋 謙昌
 地謡 田中 敏文
 谷口 雅彦
 藤田 章三
 山口 冬吾

大藏流狂言 土筆
 シテ 遊山人 善竹 彌五郎
 アド 遊山人 上西 良介
 後見 上吉川 徹

観世流舞踊子 邯鄲
 シテ 盧生 山本 章弘
 笛 貞光 智宣
 小鼓 成田 達志
 大鼓 上野 義雄
 太鼓 上田 悟
 地謡 梅若 猶義
 大西 礼久
 井戸 和男
 今村 哲朗
 山本 麗晃

観世流仕舞 花筐 昭君
 梅若 堯之
 長山 耕三
 地謡 赤松 禎友
 生一 知哉
 齊藤 信輔
 大槻 裕一

宝生流能 羽衣 盤渉
 シテ 天人 石黒 実都
 ワキ 漁夫白龍 福王 知登
 笛 赤井 要佑
 小鼓 久田 陽春
 大鼓 辻 芳昭
 太鼓 中田 一葉
 後見 辰巳 大二郎
 岡本 知子
 地謡 山内 崇生
 澤田 宏司
 辰巳 孝弥
 畑 東隆
 伊東 静夫
 堀口 雅一

附祝言
 終了予定 13:45 頃

能 鉢木 (はちのき)

[いざ鎌倉]という言葉の由来ともなった曲です。僧に身をやつした最明寺(北条時頼)が、雪深い佐野(群馬県)を訪れ、源左衛門尉常世に宿を借ります。生活に窮する中でも粟の飯を振舞い、秘蔵していた鉢木(盆栽)を切りくべて暖を取りもてなします。落ちぶれても心は真直ぐである常世の気構えを見たくて鎌倉に戻った最明寺が、関八州の武士に鎌倉入りの声を掛けると常世は取繕う事なく鎌倉に赴きます。そ

の心意気に感じいり、本来の領地と共に鉢木になぞらえた土地を与えられるというお話です。

狂言 飛越 (とびこえ)

お茶会に出発した新発知と檀家。途中小川に差し掛かります。檀家は難なく飛び越えて渡りますが、新発知は怖くて渡れません。互いに手を取り合って渡ろうとしますが…。

能 野守 (のもり)

春日の里を訪れた山伏(ワキ)が、野

を守る老人(シテ)にこの野にある溜まり水の謂れを聞くと、野守の鏡と伝えられるようになった故事を語ります。またその鏡は実は鬼が持っていたという話をします。

その鬼の持つ鏡を見たい山伏が祈祷をすると、鬼が大きな鏡を持って現われ、人の心はもとより天界から地獄まで全てを映し出して見せてくれます。白頭(はくとう)の特殊演出では、鬼の姿が膾炙して、より重厚感ができるようになります。

第2部 14:30 開演

観世流能 鉢木

シテ 佐野源左衛門常世 寺澤 幸祐
 ツレ 常世ノ妻 武富 康之
 前ワキ 旅僧 福王 知登
 後ワキ 最明寺時頼
 ワキツレ 二階堂某 中村 宜成
 ワキツレ 二階堂ノ従者 廣谷 和夫
 アイ 早打 善竹 隆司
 アイ 太刀持 善竹 隆平
 笛 赤井 啓三
 小鼓 久田 舜一郎
 大鼓 森山 泰幸
 後見 上野 朝義
 梅若 猶義
 地謡 浅井 文義
 齊藤 信隆
 山本 博通
 山本 正人
 齊藤 信輔
 水田 雄晤
 鶴 克彦
 稲本 幹汰

観世流狂言 嵐山 采女 放下僧

山田 薫
 上野 雄三
 永田 克壬
 地謡 上野 朝義
 松浦 信一郎
 井戸 良祐
 水田 雄晤

喜多流舞踊子 俊成忠度

シテ 平忠度 高林 昌司
 笛 貞光 義明
 小鼓 清水 皓祐
 大鼓 山本 哲也
 地謡 高林 白牛口二
 高林 呻二
 松井 俊介

— 休憩 15分 —

大藏流狂言 飛越

シテ 新発知 善竹 隆平
 アド 檀家 善竹 隆司
 後見 小西 玲央

観世流能 野守 白頭

前シテ 野守ノ翁 林本 大
 後シテ 鬼神 喜多 雅人
 ワキ 山伏 上吉川 徹
 アイ 里人
 笛 齊藤 敦
 小鼓 荒木 建作
 大鼓 山本 寿弥
 太鼓 上田 慎也
 後見 山本 博通
 大西 礼久
 地謡 上野 雄三
 梅若 基徳
 井戸 良祐
 山田 薫彦
 上野 朝彦
 永田 克壬
 伊原 昇
 梅若 雄一郎

附祝言
 終了予定 18:45 頃

第1部 10:00 開演

能 賀茂 (かも)

賀茂神社の創設の説話を描いた能です。播磨国の神主が賀茂に参拝すると、川辺では真新しい壇に飾られた白羽の矢を見掛けます。水汲みに現われた女(シテ)に謂れを訪ねると、この矢こそ別雷神の姿であり、昔この矢を拾った女性は御祖の神となった故事を語ります。実はその話をしてくれた女こそが神の化身で、夜になると御祖明神として現われ、人々を祝福します。やがて上賀茂より別雷神が来

臨し、五穀豊穡の恵みの雨をもたらすというお話です。

狂言 土筆 (つくづくし)

麗らかな春、二人は遊山に出掛けます。目に留まった土筆を見て古歌を読んだ処、とんでもない勘違いを指摘されます。所変わって沢でも古歌を読みますが…。

能 羽衣 (はごろも)

天人は、漁師白竜が返した羽衣を纏い、地上に幸多かれと祈りを込めて天へ舞い

昇ります。

盤渉の小書(特殊演出)では、序之舞が常の黄鐘調より高い盤渉の調子で演奏され舞後が短くなります。

又、天人は、登場から暫く橋掛に留まり白竜と距離を保つ、羽衣を返す際の白竜の詞が「松に衣を掛け置けば」と変わり、天人に羽衣を手渡す事が無くなる等、天人をより気高く近寄り難い存在に描きます。